

巻頭言 「CETL開設から20年を経て」	総合学習支援センター センター長 関田一彦……1
オンライン講義でアクティブラーニングは可能か	学士課程教育機構 准教授 高橋 薫……2
[SPACE] 2020年度春学期についてのご報告……3	
[WLC] WLCの取り組み……4 - 5	
[GCP] GCPの取り組み……6 - 7	
[CETL] CETLの取り組み……7 - 8	
新任教職員紹介……8	

オンラインに対応した学士課程教育機構のサービス： CETL開設から20年を経て

総合学習支援センター センター長 関田一彦



新型コロナウィルス感染症の世界的流行は、本学を含め、日本の大学教育に大きな転換を迫るものとなった。本学の学士課程教育機構には3つのセンターが設置されている。その中で私が関わってきた2つのセンター、CETL（教育・学習支援センター）とSPACE（総合学習支援センター）が、この春学期に際しどのように機能していたのか簡単に紹介する（他のセンターやプログラムも含め、機構の活動の実際は、各担当者が毎号報告している）。

まず本題に入る前に、少し昔話をしよう。20世紀も終わるころ、大学の教育力を問う試みが認証評価の制度化という形で顕在化してきた。その流れの中で、学生による授業評価の必要性が強調された。本学も認証評価を受けるために大学基準協会に加盟することになるが、その際の懸案の一つがこの授業評価の導入であった。授業は欠席ばかり、レポートもまともに書けない学生に自分の授業を評価されるなど、とんでもない話だと感情的になる教員は、どの学部にもいたようだ。しかし、授業は学生のために行われるのであり、学生にとって有益なものでなければならない。したがって、その良し悪しを受講する学生に尋ねるのは自然であろう。今から見れば、そんな初歩的な話に大学執行部が悩んでいたころ、私は在外研究先の大学で、図らずも授業評価の実際を見聞することになった。そこで感心したのは、授業評価結果に対して授業改善のマニュアルが用意され大学の書店で売られていたことである。授業評価は集計結果が出てからが本番である。それぞれの教員の授業の強みや弱みが見えたら、必要な改善を促さねばならない。在外研究から帰った私は、大学がまさに導入しようとしていた授業評価について、その結果に基づく教員個々の改善努力を、組織的に支援する必要性を執行部に訴えてしまった。若気の至りであった。「では、お前がそのための組織を作れ」ということで容赦なくブーメランは戻ってきた。そして、教育・学習活動支援センター（当時の呼称、通称CETL）が2000年5月に開所した。

当時のセンターの名称には「学習活動支援」が含まれている。これは教育する側の授業改善だけでは不十分であり、学習する側の学習技能向上も合わせて支援することで、はじめて大学の教育力は進捗するという考えに基づいている。CETLは開所当時から個別の学習相談や学習スキル講習を課外サービスとして行っていたが、そこで吸い上げられた学生のニーズは共通科目のカリキュラムに反映され、「文章表現法」（学術文章作法の前身）となり、「数学入門」となって科目化されていった。こうした正課・正課外にわたる学習スキル訓練や個別指導を拡充するために、2009年に「初年次・導入教育を支える学習支援体制整備」と題して大学教育・学生支援推進事業【テーマA】の補助金を獲得した。そして、この補助事業が終わる2013年に、肥大化したサービスを整理し、CETLから学生向けのサー

ビスを担うSPACEを分離独立させた。この時に開発・試行した学習支援サービスの多くが、今のSPACEに受け継がれている。さて、回顧談はこの辺りで切り上げ、本題に戻ろう。

本学では、Zoomを使ったリアルタイムでのオンライン授業を大学全体で導入・推進している。4月半ばから部分導入を始め、連休明けには全面実施にもっていった執行部のリーダーシップもさることながら、それに応じた先生方の対応力は素晴らしいと私は思っている。この対応を可能にする上で、学部ごとに取り組んだZoom学習会の役割は大きい。CETLが提供する教員支援サービスの一つPASS（Peer Assessment Support Staff）が教員の個別ニーズに対応し、学部FDを補完したことも見逃せない。彼ら彼女らは、操作方法に関する教員からの相談を受け、時にはZoom練習の相手となり、必要に応じて実際の授業での共同ホストとなって、教員たちのオンライン授業初挑戦を支えた。

一方、SPACEは5月の連休明けから、学生向けの各種サービスをオンラインで開始した。今まで対面で行っていたレポート作成支援（個別チュータリング）はZoomセッションに、対面での個別学習相談を行っていたHelp Deskは、Google Meetsを使ったサービスに切り替えた。オンラインに切り替えたことでキャンセル率が大きく減少したのが、成績不振の学生を主な対象とするオアシスプログラムである。心理系の専門家による学業支援がオンラインに切り替わったことで、大学生生活に課題を抱える学生にとって、アクセスしやすくなったと思われる。レポートチュータリングを通じて特別な配慮が必要な学生があぶり出され、オアシスプログラムに紹介された学生も何人かいる一方、Help Deskやオアシスプログラムのサービスを受ける中で、レポートの書き方についてライティングセンターの活用が促されたケースも散見される。このように各サービス間の連携が活発になっただけでなく、こうした学生支援サービスを通じて把握されたオンライン下での学生の不適応状態は、同じ学士課程教育機構内に設置した初年次教育推進室の会議で報告され、各学部・関連部局に共有されていった。

4月以降、入構が厳しく制限された中で学士課程教育機構の2センターは、オンライン授業下で戸惑う教員や学生の支援方法を工夫し、それぞれの役割を果たしてくれた。9月以降、対面授業が一部再開する中、オンラインと対面のハイブリッドな教員支援、学生支援が模索されている。本学は学生中心の大学を標榜している。学生の学びと成長を第一に考え、そのための授業づくりと課外の支援サービスを車の両輪のごとく回していくことが肝要である。20年来、一貫してこの課題意識のもとに様々なサービスを開発・提供してきた両センターが、コロナ禍においても機能し、学士課程教育を支えている。

オンライン講義でアクティブラーニングは可能か

—「学術文章作法Ⅰ」における実践—



学士課程教育機構 准教授 高橋 薫

■ 全学共通科目の「学術文章作法Ⅰ」では、コロナウィルス感染防止対策として、4月の第2週からオンライン講義を開始した。本科目は各クラス20名前後の少人数クラスで、コーディネーターの佐藤広子先生（学士課程教育機構准教授）のもと、11名の教員が連携して共通のシラバスで本講義を担当している。私を含めた4名の教員がこの4月に本学に着任し、初めて本科目を担当した。本科目では、単に書くことのトレーニングを行うのではなく、ライティングを「プロセス」として捉え、スモールステップで履修者同士の対話を通して論理的思考力や書く力を育成することをねらいとしている。知識伝達型の一方的な講義ではなく、履修者が主体的にかかわることを前提としたアクティブラーニング型の講義となっている。着任したばかりの大学で、しかもオンラインでアクティブラーニングができるのか、かなり不安な気持ちを抱えたまま新学期に突入した。しかし、蓋を開けてみると、初めて本科目を担当した私でも、思いの外スムーズに授業を進めることができた。そこで、同期型のオンライン講義で「アクティブラーニングを促すシカケ」という観点から、本実践を振り返ってみたい。本講義は、第1回の講義ガイダンスのみ事前に収録した全クラス共通の講義を視聴するオンデマンド型（非同期型）とし、第2回以降はZoomを利用したリアルタイムのオンライン講義（同期型）を行った。私が直接講義を担当したのは第2回以降であることから、初めて同期型のオンライン講義を行った第2回講義を取り上げる。90分の講義の流れは表1に示した通りである。

■ 「アクティブラーニングを促すシカケ」の第一は、できるだけ対面授業の雰囲気近づけるように、Zoomの機能を使い倒したという点である。教員が講義を行っている時、履修者はマイクはミュート、カメラはオフで参加しているが、ビデオをオフにしている時も、反応ボタンを使って「拍手」や「いいね!」という反応が見えるようにしたり、講義中に疑問があればチャットを使って質問できるようにして、できるだけ双方向のコミュニケーションを心がけた。加えて、個人ワークのあとでブレイクアウトルームを使って小グループでディスカッションをしたり、その結果をメインルームに戻ってチャットで全体共有したりした。これは、Think-Pair-Shareと呼ばれるアクティブラーニングの技法のひとつである。このようにZoomの機能を活用することで、オンライン上ではあるものの比較的対面授業と近い形の双方向のコミュニケーションが可能になり、アクティブラーニングが行えることがわかった。

■ 第二のシカケは、クラス全体で講義のルールを共有したという点である。本科目では「傾聴・共感・承認」を科目全体の共通ルールとしており、「耳だけではなく目や心も向けてひとの話を聞く」「ひとの心を感じる」、自分とは異なる意見だったとしても頭ごなしに反対するのではなく、まずは「ひとの意見を認める」ことを大切にしている。これは安易に同調するという意味ではない。加えて、同期型のオンライン講義ではそれぞれの接続環境が異なることから、通信上の不具合が生じることもある。自分がそのような状況になっても焦らないこと、また、グループ活動中にメンバーに不具合が生じたとしても責めたりせずに寛容になることをクラスのルールとした。履修者全員がこれらの共通認識を持つことにより、初めてのオンライン講義でも安心して参加できるように心がけた。

■ 第三のシカケは、十分なアイスブレイキングを行ったという点である。アクティブラーニングでは「この仲間たちとなら安心して話せる」と感じられる学びのコミュニティづくりが重要である。しかし、本科目の履修者は学部1年生で、コロナ禍で直接会ったことのない学習者同士であった。そこで、授業内に自己紹介の時間を設け、履修者同士のヨコのつながりをつくるようにした。話し手はできるだけカメラをオンにし、聞き手は「いいね!」などの反応ボタンを押してリ

項目	内容	時間
1 学習項目	第2回の学習目標の共有	5
2 講義のルール	Zoomの機能の説明と講義のルールの説明	5
3 短期目標	第2～4回の学習の見通しを立てる	5
4 アイスブレイキング	学籍番号順に一人1分以内で自己紹介	20
5 講義	「学術的な文章とは」「レポートの定義」	10
6 個人ワーク	お絵描きゲーム 1. 指示を聞いて5つの四角形を描く 2. 指示（全体像の説明の後に細部の説明）を聞いて5つの四角形を描く	5
7 グループワーク	1.に比べてなぜ2.はみんなが同じような図を描けたのか理由を考える	10
8 全体共有	チャットにディスカッションの結果を報告	5
9 講義	パラグラフライティングの基礎知識	15
10 振り返り	第2回提出物の説明と講義の振り返り	10

アクションするように伝えた。履修者の振り返りを見ると「みんなの表情や声を感じるによって、オンライン授業によって感じていた人との壁を感じずに楽しくリラックスして授業を受けることができました。」「様々な県からいろんな趣味を持った人が集っていてこれからグループワークをするのが楽しみ」とあり、アイスブレイキングにより心理的な負荷が軽減され学びの楽しさを感じていることがわかった。また、「20人くらいの人数なので、少しはクラスメイトのことを理解できた。徐々にクラスメイトのことを覚えていき協力していきたい」というように学びの共同体としての意識が芽生えている様子が窺えた。オンラインでは直接学びの場を共有することはできないものの、履修者間にこのような緩やかなつながりが感じられることが、学びの動機づけにつながると思われる。

■ 第四のシカケは、参加型の講義にしたという点である。表1に示したように講義を行った後で、個人ワークとして「お絵描きゲーム」を行った。この個人ワークには次のような意図がある。学術的な文章では、書かれたテキストを読んだときに、読み手が共通の表象を思い描くように書くことが求められる。一方、文学的な文章は読み手によって多様な解釈が可能である。この違いを履修者に体感してもらうために、活動の意図は伝えずに個人ワークを行った。履修者には、まず、教員の指示を聞いて紙に5つの四角形を描いてもらった。この時はあえて四角形の配置は示さず、指示を聞いて思いついたままに図を描いてもらった。次に、図の全体像を示してから、アルファベットのT字に見えるように5つの四角形を描いてもらった。前者は多様な解釈が可能な文学的な図であり、後者は表象が一つに収束する学術的な図となる。そして、Zoomのブレイクアウトルームを利用して、「一方の図は書き手によってバラバラなのに、なぜもう一方はみんなが同じような図を書いたのか」その理由を考えてもらった。学生の振り返りを見ると「一回目の指示での図形と二回目の指示での図形とは多くの人が違った。そういった実体験を得て、ではなぜ違った図形ができたのかという疑問を提示し、学生自らが答えを見つけることで高校まで習う機会がなかったパラグラフライティングの概要の理解が自分を含めて深まったかと思いました。」という意見や「グループセッションがあると、能動的な学びになり、さらにお互いのことを知る機会にもなる。今後の授業も積極的にグループセッションを取り入れてほしい。」という意見が見られた。このように体験を通じた参加型の学習で学びが深まり、グループワークでの他者との対話を通して能動的な学びが実現していることがわかった。

■ 以上のような本実践の学びのシカケと学びの深まりは、自分自身の力量というよりも、これまでに担当されてきた先生方が対面授業の時から積み上げた実践知と、オンライン講義ならではの工夫の相乗効果によりもたらされたものである。このようにオンラインであってもアクティブラーニングは可能であると考えられる。

付記：本稿はアカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会オンライン・ラーニングカフェ（2020年5月30日）での発表資料「オンライン講義でアクティブラーニングは可能か—「学術文章作法Ⅰ」における実践—」高橋薫・佐藤広子・康潤伊・佐々木さくら・柴田香奈子・下園勇磨・鈴木道代・高橋博美・寺本羽衣・仲間静香・福博充を加筆修正の上、作成した。



2020年度春学期についてのご報告

2020年度春学期は、新型コロナウイルス感染防止のため、SPACeのサービスも授業と同様、オンラインで行いました。ここでは、春学期のSPACeの取り組みについてご報告します。

ヘルプデスク

今学期は特に、入学したものの大学が閉鎖となり、オンラインで授業を受けることに不安を感じている1年生が多数いました。そういう1年生の相談に継続して乗るために、ヘルプデスク学生によるピア・サポートのサービスを行いました。

学習相談では、オンライン授業に伴い、自己管理（タイムマネジメント）の相談が圧倒的に多い状況となりました。学習セミナーでも目的

的を達成するためのタイムマネジメントのセミナーは60名以上の参加で好評でした。

■ 2020年度春学期利用者数

	5月	6月	7月	計
ピア・サポート	0	111	85	196
学習相談	66	18	20	104

日本語ライティングセンター

日本語ライティングセンターでは、5月からZOOMによるレポートチュータリングのサービスを開始しました。レポートを画面共有しながら30分間の対話により学生がレポート作成でつまづいている点を支援する内容です。学術文章作法での1年生の利用が中心でしたが、2～4年生も計44名の利用がありました。

・学習セミナー

今学期は初のオンライン開催で4セミナーのみの開催でした。それにも関わらず、出席者数は236名で昨年を超えています。1セミナーあたりの平均出席者数は、2019年春学期より45.9人増加しました。また、学部生から大学院生まで幅広く参加がみられました。理由として、①開催内容・時期・方法が学生のニーズに即していた、②「学術

文章作法Ⅰ」授業内での広報が効果的であった、③ポータル情報を確認する学生が例年より増えたことが考えられます。秋学期も学生のニーズに対応したセミナーを開催する予定です。

■ 2020年度春学期利用者数

	5月	6月	7月	計
レポートチュータリング	32	86	127	245
レポート診断	0	46	28	74



調べごと相談

「SPACe調べごと相談」のコーナーでは、レポートや卒論の参考文献検索、データベースの利用方法、その他の調べごと等の相談に応じるレファレンスサービスを行っています。

春学期は、大学の感染症対策に伴うフルオンライン授業に対応するため、春学期より、オンラインレファレンス（①オンラインWeb会議システムでの対応、及び②メールでの対応）を行いました。アクセスし易い「オンライン」という実施方法であったことやメールでの対応も追加したこと、又、授業サポートやオンラインセミナーを通して「学術文章作法」担当教員と連携したこともあり、昨年度と比較して春学

期の質問件数が1.26倍に増加しました。

今後もオンラインサービスを継続しつつ、社会状況や学内の状況を踏まえて適したサービス体制を検討し実施していく予定です。

■ SPACe調べごと相談(レファレンス)利用者数/2020年度春学期

	4月	5月	6月	7月	春学期	%
学術文章作法	0	4	17	22	43	81%
演習(卒論)	0	0	1	0	1	2%
その他	1	2	5	1	9	17%
	1	6	23	23	53	

SPACe PCルーム利用

SPACeでは従来、図書等資料の閲覧サービス、自習やグループ学習のための空間、共用PCを利用できるPCルームなどを提供してきました。コロナ禍による大学閉鎖と春学期授業の全面オンライン化を受けて、SPACeも春学期開始当初から閉鎖していましたが、大学の入構制限の部分的緩和に伴い、自宅にPC環境・WiFi環境が整っていない学生向けに、webによる事前予約制で、学習目的でのPCルームの座席提供を6月23日から開始しました。座席を問引くことで間隔を2m以上確保し、授業実施日の午前と午後でそれぞれ定員11名の枠を設けて運用しました。

提供開始後はほぼ毎回、予約・利用があり、PC環境・WiFi環境への需要があることが推察されましたが、予約率が100%に達したのは1回のみで、需要を満たす座席数を提供できませんでした。一方で実際の利用率は予約率の半分程度となっており、「とりあえず予約したうえで、実際に利用するかどうかは改めて判断する」傾向が強かったことも伺えます。

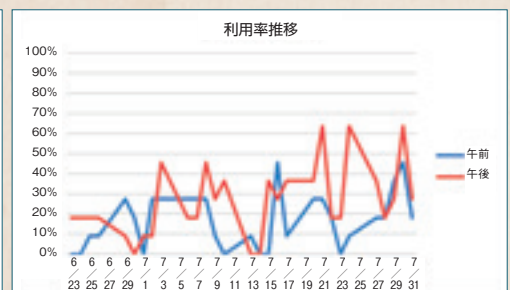
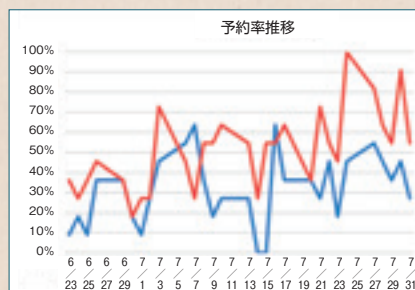
実際に利用した学生へのアンケートでは、ネット環境やプリンターを利用できることへの喜びの声のほか、「人が

■ 2020年度春学期 SPACe PCルーム予約・利用実績

	午前予約率	午前利用率	午後予約率	午後利用率
平均	32%	17%	51%	26%
最大	64%	45%	100%	64%

少なかったため、安心して勉強できた」「Cゾーン（SPACe内の静粛に自習する部屋）も利用したい」などの声もあり、落ち着いて勉強できる環境への需要が一定程度あることがわかりました。

SPACeは秋学期、大部分のエリアを、座席間隔を確保したうえで、開放します。引き続き学生の学習環境の整備・提供に取り組んでいきます。



WLC SAC オンラインセッション

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、2020年度春学期の授業が原則オンラインで実施されることになった。それを受け、ワールド・ランゲージ・センター（WLC）、セルフ・アクセス・センター（SAC）のプログラムも同様にオンラインで実施することとなった。

オンラインセッション実施に際し、まずスタッフも学生もZoomに慣れていなかったため、利用者用とスタッフ用の両方のマニュアルを作成した。また、通常の学期では、プログラムの利用は外国語科目の課題として学生に課されていたが、春学期は授業課題としてプログラムを利用することはできなくなった。また、VIP（Very Important Person）システム（自発的にプログラムを利用してもらい、その回数に応じてランクが上がり、図書券やプログラム利用の特権などを受け取ることができる）も実施しないことになった。これらは、多数の学生がプログラムを利用した場合、受け入れ切れないという問題があったためだが、その分利用者数と学生の動機づけの低下が懸念された。これに対応するため、各プログラムのプロモーションにより力を入れた。具体的には、ポータルサイトでの掲載やSNSへの投稿の頻度を上げた。またWLC教員にもオンライン授業内でプログラムの利用を学生に推奨するよう依頼した。

次に、オンラインセッションに対応するため、スタッフトレーニングにも変更を加えた。具体的には、Zoomのツールを活用した少人数でのセッションの進め方、参加者のレベルに差がある際の対応、対面時と同じような活気的なセッションの作り方などについてトレーナー（WLC教員）にアドバイスしてもらった。その他にも、オンラインセッションは全スタッフにとって新しい経験であるため、スタッフ同士で問題やその対処法などを共有する時間を多く設けるように心がけた。

オンラインセッションにおいては、一人ひとりがより多く発言できるように、各セッションの定員を減らした。少人数で実施したことにより、参加者からは発言がしやすいといった声が多く寄せられた。また、ライティングセンターでは、今まで紙のやり取りで行っていたレポート添削を、オンラインで実施した。スタッフに関しては、よりクリエイティブに、また集中して準備に取り組んでもらえるよう、オンライン化に伴う追加業務をできる限り軽減できるよう心がけた。学生にとっても、不自由を感じることの多い中、ストレスが増す時期であったため、セッションでは学生同士、有意義で楽しい時間を過ごせるフレンドリーな雰囲気づくりを目指した。

春学期の開始当初、オンラインセッションの実施について不安もあったが、運営を終えてみると、オンラインという状況が功を奏した面もあった。まず、少人数でセッションを行えたため、参加者がより積極的に発言することができた。このような参加者の姿がスタッフのモチベーションにもつながった。また、アンケートに寄せられた学生の声に、オンラインの場合、空き時間に気楽に参加できるという意見が複数あった。

さらに、英語学習相談室では学習者が自律して自身の英語学習を進められるよう支援しているが、今学期は、一對一の学習相談をオンラインにて行い、学年や学部問わず多くの学生が利用した。そして、5月にはオンラインワークショップを4回行い、自宅待機の時間を有効活用できるオンラインでの英語学習方法等を紹介し、計300名の学生が参加した。

しかし、春学期の運営ではスタッフとして雇用すべき留学生の確保がままならず、十分なセッション数を提供できなかった。そのため、授業課題としての利用は断念したが、その結果稼働率が低下したプログラムもあった。また、提供できるセッション数が少なかったため、早い段階で予約が満席になってしまうこともあった。将来、万一同じような状況に陥ることがあることを想定すると、留学生スタッフをいかに確保するかが課題となる。秋学期もオンラインでの運営が決まっている。担当教職員で協力しながら、学生に最も良い形でSACのサービスを提供できるよう努めてまいりたい。



オンラインセッションの様子

共通科目英語科目 English I (Basic) での取り組み

WLCでは2020年度春学期、すべての共通科目英語科目をオンラインで実施した。以下は、そのうちアンドリュース・トゥイード、アスカ・ハルバート各WLC講師、尾崎秀夫文学部准教授・WLC長が担当したEnglish I (Basic)（6クラス、総履修者数105人）における取り組みの概要である。

同科目では、大学間連携共同教育推進事業（2012～2016年度）において開発された共通基盤システムにある英語コンテンツを利用し、千歳科学技術大学の支援の下、Computer-Based Test (CBT) を作成し利用した。

CBTでは、受験者によるある問いへの解答が正解か不正解かにより次の問題の難易度をコンピューターが判別し出題する。それを繰り返すことで受験者が安定して正解できるレベルをコンピューターが推定する。そのため、単に正解の数を得点とするテストよりも、正確な測定ができる。今回作成したCBTは学生に英文法の問題12問に解答してもらうことで、1～7（7が最上位）のいずれのレベルにあ

るか判定できるように設定した。さらにこのシステムでは受験者のレベルの判定に加え、それに基づくグループ編成機能が盛り込まれていた。レベルの近い者同士、或いはレベルの違う者同士が同じグループになるよう指示を与えれば、システムがグループ編成を行った。また、学生はスマホでCBTを受験することができた。CBTのこのような特徴が、オンライン授業実施という事態にあって功を奏した。

オンライン授業であっても、学生同士協力して課題（英文法の練習問題）に取り組むこと、知識・スキルの習得だけでなく、人間性（勇気・共感・レジリエンス等）の育成を目指した（ヒューマンスティックアプローチ）。その基盤となる、内発的動機づけを人間の基本的欲求を満たすことで高めようと努めた。ここでいう人間の基本的欲求は自律性、有能性、関係性であるが、自律性については学生に選択の機会を与えること、有能性や関係性はグループワークでの他の学生からのフィードバック、役割の分担と遂行などにより満たすこととした。グループワークについては、Zoomのブレイクアウトセッション機能を使ったが、その際CBT設定システムのグループ分け編成機能が役立った。

学期開始直後は、教員学生共にオンライン授業自体に慣れるところから始まったが、次第にCBTを中心とした内容へと移行することができた。特に3人の教員は毎週1回ミーティングを持ちCBTの運営とそれを軸にした授業内容について検討を重ねた。その結果、CBTを受けていく過程で結果が少しずつ向上していった。学期中実施したアンケートからは、基本的欲求の充足感、内発的動機づけがともに高まったことが確認できた。人間性の育成についても、「質問することを怖がらなくなってきた（趣旨）」という学生の声にもあるように一定の伸長が見られた。

2020年度春学期共通科目英語科目でのCBTを用いたオンライン授業について述べた。オンライン授業でも知識・スキルの習得と人間性の育成において一定の成果を挙げることができた。ただ、依然としてオンライン授業では、ブレイクアウトセッションの際など教師が学生の言動を細かく追うことはできない。オンラインである環境を活かし、例えばグループワークにおける学生の言動についてどのよ

うな貢献をしているリアルタイムで記録できるような仕組みが構築できないものかと思われた。

WLC PDでの取り組み

2020年春学期、WLCではPDセッションを3回開催した。各回とも、オンライン授業実施に対応するため、教員が使える一般的なツールや、応用しやすいテクニックをトピックとした。

第1回のセッションでは、マルコム・ブレンティス講師がPLASと同様の機能を持つGoogle Classroomを紹介した。Google Classroomは教師がGoogle Driveに資料を保存している場合有効なツールである。Googleのアプリケーションユーザーである教員に好評であった。

第2回は、English Medium Program (EMP) を担当する教員を対象に行われた。ここでは、ZoomやFlipgridを使い活動に双方向のやり取りを生じさせる方法を学んだ。オンライン授業という環境でも、学生同士、学生と教員との相互交流の機会を増やし学びを深めていきたいという教員の思いに応えた。後半には質問会も行われ、4月から開始になったオンライン授業の問題点を解決できるよい機会となった。

第3回のセッションでは、富田浩起講師がヨーロッパ言語参照枠 (CEFR) に基づいた、学生がスピーキングスキルを自分で伸ばそうとする自律性を育む指導法を紹介した。続いて、ナサニエル・フィン講師はGoogle Formを使い学生が互いのスピーキングを評価し合う方法について述べた。こちらもEnglish I / IIで目指しているCEFRに基づいたスピーキングスキルの育成に関わるもので、オンライン授業であってもテクノロジーを有効に使いながら、科目の目標を達成する方法を学ぶことができた。

以上が、春学期行ったWLC PDセッションであるが、対面のPDセッションに比べ参加者数が増加したことに触れておきたい。特に第2回のセッションではこれまで最高の30名を超える参加者があった。また、教員一同、これまでにない経験を積み、新しいスキルを習得することができた。オンライン授業となり、このような進展が見られたことは大きな収穫であった。

WLC 教員の紹介 富田 浩起 講師



富田浩起講師は2014年に創価大学大学院でTESOLの修士号を取得し、同大学で3年間助教として働きました。その後、玉川大学、中央大学、青山学院大学、学習院大学で非常勤講師として教鞭をとり、2019年よりWLCに所属しています。2019年度は共通科目英語科目、法学部の英語で学ぶ国際関係論を担当しました。2020年度からは、上記科目に加え工学部の英語科目、法学部のグローバルロイヤーズプログラムの英語科目を担当します。富田講師の研究テーマは、学習者の自律性の向上です。中学・高校の英語の授業は受験を見据え、主に教員主導のインプット型で行われています。つまり、実際に英

語を使って意思伝達を行う能力の育成というより、知識として蓄積すべき対象として扱われている傾向があります。しかし、大学では学生が主体となり授業を構築していくアクティブラーニングが採用され、そのギャップに苦戦している学生を多く見かけます。富田講師の研究では、学習者がそのギャップを克服し、言語学習に対してのモチベーションを向上させるための教育介入の方法を模索しています。具体的には、graded readersと呼ばれる英語の多読用教材を読むというセメスター単位の課題に対して、学生自らが目標を立て、学習プロセスを管理し、その目標を達成するための手法を習得します。学生と共に少しでも多くのことを学び、英語力向上の手助けができる学習環境を作ることができるよう日々努力されています。

グローバル・シティズンシップ・プログラムのオンラインの取り組み

GCPディレクター 佐々木 諭

2010年度に開設したグローバル・シティズンシップ・プログラム (GCP) は、10年の節目を越え今年度11年目を迎えました。次の10年を目指した出発は、新型コロナウイルスの流行により、通常新入生の新学期前に実施される2次選抜試験は、5月中旬に延期となり、2次選抜試験を含めGCP授業もすべてオンラインにより実施することになりました。ここでは、GCPのオンラインを用いた選抜試験、学生のサポートについて紹介します。

1. オンライン試験による2次選抜試験

GCPの2次選抜試験は、例年、英語ライティング試験、小論文、面接試験が実施され、入学時に受けるプレイメントテスト (国語、数学、TOEIC) のスコアを参考に、総合的に評価を行っています。今年度は、対面での試験実施を模索しながらぎりぎりまで検討してきましたが、最終的に2次選抜試験日を5月8日変更し、すべてオンライン試験での実施に切り替えました。

オンライン試験では、これまでの選考基準である学生のプログラムへの適正とポテンシャルを評価するため試験科目と方法を維持しながらも、試験の公平性と客観性をいかに保証するかが重要な鍵となりました。英語ライティング試験と小論文試験の筆記試験では、Zoomを用いて選抜試験を受験した学生全員をモニターで試験官が監督することにより、試験が適正に実施できるよう努めました。試験の実施に先立ち、受験生が事前にZoomのサインインや解答提出の予行演習を行い、試験当日に支障なく実施できるよう準備しました。試験を担当していただいた教員、事前準備も含め、当日の運営を担当された職員、なによりオンライン試験に協力してくれた受験生のおかげで、無事に2次選抜試験を終え、GCP11期生32名が選抜されました。

2. オンラインによるチームビルディング

プログラムでの学生の学びにおいて重視している取り組みの一つにラーニング・コミュニティの形成があります。そこでは、学生同士が共に励まし、競い合いながら、より高い目標に向かって挑戦していきます。例年では、プロジェクト・アドベンチャーの手法を用いてチームビルディングを高めてきました。これまでの学生の振り返りでも、「プロジェクト・アドベンチャーのおかげで、互いのことをよく知り、その後の授業でのグループワークもスムーズに行うことができました」との感想が寄せられていました。

今年度は、学生同士が集まって参加するプロジェクト・アドベンチャーの実施が困難なため、代わりに、リモートコラボレーションツールのMural (ミューラル) を用いて、オンラインによるチームビルディングのためワークショップを開催しました。リモートコラボレーションツールとは、参加者がオンライン上でホワイトボードを共有し、そこに付箋を貼ったり、コメントを書き込んだり、画像や動画をアップロードできるツールです。同時にZoomをつなぐことで、画面を共有するだけでなく、ディスカッションしながら作業をすすめることができます。今回のチームビルディングでは、合意形成を学ぶ二つの

ゲームを用意し、学生もオンライン上で積極的に参加し、チームビルディングに努めていました。

3. オンライン面談による1年生のサポート

GCPのラーニング・コミュニティは、同学年だけでなく、学年の枠を越えた先輩と後輩のつながりが強いことも特徴の一つです。特に1年生は、GCPの授業が始まった直後は、授業の課題の取り組みやタイムマネージメントなど様々な課題に直面します。それらの課題に対し、先輩がこれまでの経験をもとに、丁寧に1年生の相談に乗ったり、アドバイスを与えたりしてきました。今年度は、1年生のためのサポーターを3年生以上のGCP生から募り、13名のGCP生がサポーターとして、5月から8月にかけて、月に1回1年生とオンライン面談を実施してきました。

1年生が直面する課題の中でも多かったものは、オンライン授業で主に一人で勉強する中でどのようにモチベーションを高めていくかということや自宅での生活の中で勉強習慣をどのように作り上げていくかなどでした。サポーターの学生もはじめてのオンライン授業でもあり、一緒に悩み、考えながら1年生のサポートに尽くしてくれました。

4. オンラインキャリアワークショップ

最後に、オンラインキャリアワークショップの取り組みを紹介します。

GCP授業のプログラムゼミ1では、内的キャリアや外的キャリアの分析をととして、キャリアデザイン力を高めることを目的としています。外的キャリアの分析には、実際に社会で働いている卒業生の言葉は何にも代えがたい貴重な情報となります。そのため、7月から9月にかけて、3回にわたり卒業生を迎えてオンラインキャリアワークショップを開催しました。

各ワークショップには6名から7名の卒業生が参加し、第一部は自己紹介を含めた業務内容や近況を報告してもらい、第二部ではグループセッションを2回行い、学生の質問に卒業生が丁寧に答えていました。

今回のワークショップには、合わせて20名の卒業生が参加し、中央官庁、コンサルティング、金融、証券、家電、自動車、食品、製薬企業や、弁護士、研究者、教員など多様なキャリアで活躍されている先輩の話は、GCP生にとって大きな刺激になりました。また、沖縄、福岡、広島など日本国内のみならず、北京、シンガポールからも卒業生が参加し、オンラインならではの利点も生かすことができました。

キャリアワークショップに参加した学生の感想も併せて紹介します。

キャリアワークショップに参加した学生の感想

■ 今回のキャリアワークショップでは、先輩方が具体的にどういった姿で学生生活を過ごし、そしてどういった職業に進んだのかを知ることができ、自身のキャリアデザインにとって大変参考になりました。また印象に残った点として、先輩方は学生時代、学業に大変励まれていたのは当然、さらに読書や他の点でも鍛錬されていたということです。これを機に、漠然と何がしたいかだけでなく、具体的に何をすべきかまでさらに考えなければと感じました。(文学部1年生)

■ 進路選択をどのようになされたのか、留学先で何を学んだのか、自分の専門科目や興味のある分野と英語学習をどのように両立したのかなど、共通する悩みや葛藤を教えていただき、アドバイスをもらうことができ、とても有意義な時間となりました。(法学部2年生)

■ 活躍されている先輩のお話を聞き、とても興味深く、改めてGCPの可能性の広さを再確認しました。卒業生が「優秀な人が周りにたくさんいる中で自分に何ができるか」という内容の話をしており、とても感動しました。自身の力量を自覚しつつ、その上で私にしかできないことを探していこうと思います。(経済学部1年生)



第1回キャリアワークショップの様子

CETL

教育・学習支援センター

<https://www.soka.ac.jp/cetl/>

■ オンライン授業における各学部のFD活動

経営学部 里上 三保子

新型コロナウイルスへの対応として3月半ばに春学期がオンラインでの開講となることが決まった時、経営学部の教員の多くはこれまでオンライン授業の経験も、Zoomを使ったこともなかった。そこで、早速3月末からZoomの利用練習会を開催し、教員同士で実際の授業を想定し、教員役と学生役を交代するなどして、円滑に開講できるように準備を進めた。この練習会には春学期に授業を担当する専任教員全員が参加した。それでも授業が実際に始まると様々な問題が生じるなどしたため、そのたびにメール等でそれらの問題点や課題を共有した。さらに学部全体として授業の質の向上に努めることを目的とし、非常勤講師も交えてオンライン座談会を定期的に開催することとなった。この座談会にも毎回少なくとも8割を超える専任教員と半数の非常勤講師の参加があり、各教員の取り組みを学びあい、学生からの要望などといった課題を共有して解決策を出し合うなど、非常に有意義なものであり、授業の質の向上に大きく役立ったと考えている。7月にはCETLと共催し、愛媛大学の仲道雅輝講師にオンライン授業における成績評価についてお話しいただいた。なお、どうしても都合がつかずに座談会に参加できなかった教員には、座談会の内容をまとめとして書き起こしたものを共有しているため、参加・不参加によって共有できていないことに差が出ないように配慮している。こうした取り組みは秋学期以降も継続していく予定である。

看護学部 添田 百合子

COVID-19感染症の影響により全学のオンライン推進の方針を受け、看護学部では次のような取り組みを行っています。

1) 看護学部オンラインサポーターの活用

学部内にZoom講師、オンラインの相談役を担う役割としてオンラインサポーターを作り、学部で活用しています。

2) 学部主催「はじめてのZoom勉強会」を開催(2回)

3) 全学で開催される研修会への参加

教員が全学で開催される研修会に参加できるように、学部CETLセンター員がこまめに連絡をし、研修後にはその内容を学部全体にメールで配信し共有しています。

4) 学生とともに創る授業

ブレイクアウトルームを活用したグループ学習、Google G-Suiteの機能を使った学びの共有、個々の質問に対応する仕組みをつくり、学生の意見を吸い上げ授業に取り入れるなど学生とともに創る授業に取り組んでいます。

5) その他、委員会等の後などに、教員同士がオンラインへの取り組みを自由に話し、ともに考えることを大切にしています。引き続き、学部全体で課題を共有しながら、改善に取り組んでいきたいと思っています。

教育学部 富岡 比呂子

教育学部では、春学期開始前からZoomの使い方に関する説明会の機会を持ち、学期中にも学部専任教員向けのZoom懇談会を計5回開催した。加えて、教職関係の非常勤の教員を対象としたZoom懇談会も実施し、Zoomを使用していて困難を感じる事項、質問などを個別に報告いただき、今後の改善策について検討した。また、PASSを使って授業観察もおこない、客観的に授業進行やディスカッションをモニターしてもらう試みもおこなった。

懇談会では、授業中に学生から出てきた要望をはじめ、オンライン授業中に起こったトラブルの内容や円滑に授業を進める工夫を共有しながら、効率的にオンライン授業を進める方法を検討してきた。具体的には、期末レポート以外の形成的評価を成績評価に組み込む案、学生による相互評価の活用、授業におけるクリッカーの活用、ブレイクアウトセッションの事前割り当て機能の活用や各グループのモニタリングについてなどが議題に上がった。

■ PASSの取り組み

PASS (Peer Assessment Supprt Staff) は、授業改善サポートを目的とし、依頼があった教員の授業を、様々な観点から観察・記録し、それを報告書にまとめ教員にお返ししています。記録だけでなく、学生の目線からの意見や感想もお伝えすることでより「生きた」報告書作りができています。授業観察での教員とのコミュニケーションや、報告書作成によって培われるスキルは、社会に出ても活用できると感じます。

創価大学ではコロナ禍に伴う授業のオンライン化に合わせ、「Zoom研修会」というサポートシステムを導入しました。教員1名に対しPASSが数名で要望に合わせて対応します。パソコンに不得手な教員をはじめ、Zoomを効果的に使った授業を行いたいという教員が50名以上参加を希望され、講義型の研修会や配布されたマニュアルでは不十分な点をサポートしました。6月からは、「相談窓口」として、教員が自由に入出りできる体制に変え継続し、これまでにいただいた質問と解決法をまとめた「Q&A資料」の制作も行いました。

PASSの活動を通して感じたことは、創価大学の学生第一の理念と、オンラインツールの普及具合です。教職員のご尽力により4月上旬にはオンライン授業が開始されました。その中で新たなニーズが生まれ、型にとられない柔軟な対応が求めら

れました。コロナ禍において、教員の方々も経験したことのない状況となり、コンピューターに不慣れな方も少なくない中で、「少しでも学生によい授業をしたい」と考えてくださる方が多くいらっしゃることにとても感動しました。Zoomの使い方を学生であるPASSがお伝えすることによって、教員と学生双方の立場からの不安や、授業に対する思いなども共有でき、お互いに感謝の思いを持って授業に臨めるメリットがあると感じました。一方、研修に来られたほとんどの教員の方がオンライン会議ツールを初めて使用される方であったことなどから、創価大学におけるZoomなどのオンラインツールの未普及も実感することとなりました。コロナ禍に限らず様々な状況に対応できるオプションとして、オンラインツールの研修制度やマニュアルを充実させる必要性を感じました。

急速に迫られた授業のIT化には多様な課題があり、個々人に合わせた実践的なサポートが必要だと感じます。その一助としてPASSが活躍し、今後も教職員と学生が一体となってより良い学びの場を築いていければ幸いです。このような機会をくださった皆様に心から御礼申し上げます。

(鳥飼・佐藤)

■ 理工学部共生創造理工学科の基礎科学実験（応用物理系）での取り組み

理工学部共生創造理工学科 窪寺 昌一

題名が具体的なものは、理工学部共通の取り組みではなく、特定科目（基礎科学実験、1年必修）でのそれに限定しているからです。

応用物理系テーマでは測定器についての座学と電気回路、力学（振り子）実験についてオンラインで行いました。座学ではPC内蔵カメラと携帯カメラを駆使して測定器を演示したもののリハーサル不足を感じました。確認の小テストは学内ポータルではなくグーグルフォームで行いました。実験は本学が紹介しているコロラド大学のシミュレーションソフトを用いました。

学生が測定したデータを見ても統計的なばらつきが適度にありよくできているものだと感じました。

学生アンケートでの改善点で多かった意見は、音が途切れる、カメラを固定する（カメラ酔いする）、画質を改善する、といったハード的なものが多く反省しきりです。

最後に、本学科では1年生の最初に行う実験で実際に手を動かす機会が与えられなくても学年が進むに連れ他の実験科目で関連する内容をカバーできるカリキュラムになっており、学生にも周知させています。

学士課程教育機構
新任教職員紹介

WLC……………助教 マメ・スズン・ミツコ



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第20号
発行日 2020年12月7日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<https://www.soka.ac.jp/seed/>

